

## 基調講演

『富山湾読本』発刊記念 日本海学シンポジウム

2012年2月11日(土) 13:30~16:40

北日本新聞ホール

### 「要素還元主義からホーリズムへ—文明論と日本海学—」

講師 国立西洋美術館館長 日本海学推進機構会長

青柳 正規 氏

#### 1. 世界人口の推移

##### 1-1. 世界人口の経年変化

世界人口は、1987年には60億人を超え、大変な数になりつつあります。

1985年ごろに国連が出した世界人口の移り変わりの予想は、最低のものから標準的なもの、最大のもの、いろいろばらつきはありますが、何しろ2025年のころには80億近くまでいくであろうという推計です。

それだけを見ると、何となく世界の人口は緩やかに移行していて、特に先進国の場合はほとんど横ばいである、あるいは日本などはむしろ減少傾向にあるように見て取れます。一方、発展途上国はまだまだかなりの勢いで人口が伸びるという予測になりますが、実は、人類の人口の移り変わりをもうちょっと大きな軸で見ると、また違った見方になります。

例えば、同じく国連の推定ですが、先史時代、人間がこの地球上に現れたときから今から2000年ぐらい前、例えばローマ時代や漢の時代までは、本当に緩やかに推移していました。



※国連人口部は1999年に世界人口が60億人に到達したと発表したが、その後の人口統計の改訂により60億人に到達したのは1998年だったと改正した。

産業革命が起こる1800年ごろまでは、緩やかに緩やかにしか人口は増えていないのです。ところが、産業革命でイギリスで蒸気機関などが発明されたころから、急激に人口が増え、もう爆発状態なのです。人口の爆発状態と言われるほどに、一直線に増えていっています。例えば紀元0年前後のころは、この地球上全体で約4億人しか人間はいなかったといわれています。それが1998年に60億人を達成して、現在では70億人ぐらいになって、50年には93億人にまでいこうとしている。人間の数は、とんでもなく増えているわけです。

恐らくいろいろな考え方がありますがけれども、地球温暖化や環境の悪化、それに伴って水面がだんだん上がってくるとか、さまざまなことが起こっている本当の理由は、恐らくこのとんでもなく急激に増えていっている人口のせいです。

ところが今は、例えば人権問題であるとか、生命の尊さであるとか、一人一人を大切にすることが、地球上で最も基本的な、誰もが持っている考え方です。ですから、この人口の傾向をがばっと減らすようなことはできません。もちろん、あまりにも人口が増えすぎるといことで、中国が戦後に始めた一人っ子政策や、最近はあまりやりませんが、インドでも以前はなるべく子供を少なくしようという運動はありました。

しかし、生まれてきた一人一人の権利と生命は何よりも大切なものであるということが、今のわれわれが住んでいる現代社会の一番の基本なのです。そういう考え方から延長すれば、人口が増えることを抑制するのは非常に難しい状況になっています。

## 1-2. 人口増加と環境悪化

自然界を見ると、カナダの林業の会社がずっと統計を取っていたので分かったのですが、例えばシロウサギの数がぐっと増えると、ヤマネコにとっての食料が増えますから、ヤマネコの数もぐっと増えていきます。それで、シロウサギをたくさん食べていきます。そうすると、シロウサギはがたっと数が減ります。すると、ヤマネコにとってのえさが減るので、ヤマネコ自体の数も減るのです。捕食者であるヤマネコが減ってくると、今度はシロウサギが食べられる危険がなくなって、ぐっと増えてくるわけです。そうすると、えさが増えるので、ヤマネコもまたどんどん増えてきます。すると、また食べてしまうので、シロウサギはがたっと減る。そうすると、ヤマネコもがたっと減る。こういう繰り返しをずっとしてきているのです。それで、ある地域のある広がりの中の森林の中にあるヤマネコとシ

ロウサギの数は、増えたり減ったりしながら、ほぼ同じ状況でずっと来ているわけです。

ところが人間だけは、ただただ増えているのです。この地球上で減ってきていない唯一の生物が人間なのです。もちろん途中で、ヨーロッパで大変なペストがはやったり、明治期にインフルエンザがはやったりして、わずかに減るようなときもありましたが、大きなレベルで見ると、どんどんどんどん増えています。

では、ちょうどシロウサギにとっての天敵がヤマネコであるように、人間にとっての天敵がないのかという疑問を持ちます。実は、この40～50年で明らかになったのですが、人間が増えれば増えるほど地球上の環境が悪くなります。つまり、地球環境の悪化というのは、ちょうどシロウサギが増えてきたときに、ヤマネコが増えてくるのと同じように、人間が増えると環境悪化という天敵が巨大化していくわけです。その結果、将来、本当に人間の住む環境が悪くなって、人口が減るかもしれません。

そこまで環境が悪化してしまうと、もう人間には回復力がありません。ヤマネコとウサギの関係で、食べられすぎてウサギの数が減れば、ヤマネコも減る。ヤマネコが減ったから、今度はシロウサギが増えるというような、自然の復興力・復活力が人間にあるかというと、恐らくそれはないと考えられます。あるいは、もしもその環境の悪化で人間人口が減るという事態にまでなれば、その環境悪化は人間にとっては大変に厳しいものになるでしょう。そうだからこそ、今、みんなで手を携えてどうにか環境悪化を防いでいこうという運動が地球全体に広がっているのです。

## 2. 気候変動問題

### 2-1. 世界の平均気温の変化

今、温暖化の問題が言われていますが、ヨーロッパでいえば中世、日本でいえば平安から鎌倉にかけては、気温は結構高かったのです。その代わりに、1800年ごろまでの約200年間はかなり寒くなり、それ以降はぐっと上昇しています。

これについて、いろいろな学者がいろいろな説を唱えています。こういう気候変動、特に気温の変化というのは、環境が悪化したからではないということを言う学者もいます。しかし、少なくとも1900年以降、特に1960～1970年からの変化は、今までの人間の歴史の中ではなかった急激な変化なので、どうしても人為的なものが作用している。つまり、CO<sub>2</sub>が増えていることによる結果だと多くの研究者たちが考えています。それほどに今、急激な気温の変化が訪れているのです。

## 2-2. 気候変動と農産物の収穫量が歴史に与えた影響

1800年直前はずっと気温が下がっていたので、世界中で農産物の採れ方が悪くなっていました。その収穫量の減少が一つの原因となって、フランス革命が起こったと主張する歴史学者もいます。また、ロシアでは中部シベリアの毛皮をほとんど取り尽くしてしまったので、当時のエカチェリーナ女王は東シベリアにまで狩猟隊を送り込み、ヨーロッパ向けの最大の輸出物であった毛皮取りを奨励します。さらに、東シベリアだけではなく、当時、自国の領土であったアラスカにまで遠征させて、毛皮を取らせようとします。そのためには、どうしても今のハバロフスクとか何とかというシベリアの港から日本に寄って、日本からアラスカへ行かなければいけないということで、日本に開国を要求します。

当時の日本の老中は松平定信です。松平定信は、外国から入られてくるといろいろと面倒なことが起こるからと、「わが国は昔からの決まりによって、外国人を入れない」と初めて宣言します。ですから、われわれの頭の中には、三代将軍・徳川家光のころに鎖国をしたという概念がありますが、これは全く誤りです。正式に幕府が、鎖国というか、国を閉ざしているということを海外に対して表明したのは松平定信が初めてです。

むしろ家光のころまでは、秀吉が朝鮮出征をしたことから、日本はとんでもなく乱暴な国である、戦争好きな国であるとして、東アジアの中で評判を落としていました。家康は幸いなことに朝鮮遠征には参加していなかったもので、「自分はそういう無茶な、乱暴なこととはしない。だから、新しい政権になった徳川幕府を認めてくれ」ということで、海外から認められることによって、自らの政権の正当性を証明しようとしています。むしろ外交によって政権を正当化しようという努力をしたのです。

その仲介に立ったのが対馬藩です。対馬藩は一生懸命、今の朝鮮に「どうか正式の使節を江戸に送ってくれ」と働き掛けます。朝鮮の方は「正式の要請状さえあれば出掛けてやってやる」と言います。ところが、徳川幕府は「要請状を出すことは、朝鮮の下に身分を置くことになるので、それはできない」と拒否するのです。

結局どうしたかというと、対馬藩がにせの手紙を書きました。徳川幕府が書いたかのような文章で朝鮮の王に「使節を送ってください」と書き、朝鮮の方もそれが偽物であることが分かっているのですが、あくまでも正式の手紙であると解釈して、日本に使節を送ります。それが朝鮮通信使です。対馬が偽物を書いたのだらうということは、幕府も分かっていたと思います。分かっているながら、朝鮮から通信使が来ることによって幕府の正当性が認め

られればそれでいいということで、大変な大歓迎をするわけです。

ですから、そのころはまだ鎖国はしていませんでした。もちろん、家光のときから長崎に出島を築いて、通商（貿易）はオランダと中国（明）と琉球、通信（外交）は朝鮮と決めてやってはいました。ポルトガルやスペインは、キリスト教という大変に危険な思想を持っていると判断したが故にシャットアウトしています。一方、オランダは商売しか関心が無い。自分の国で大変な新教とカトリックの新旧キリスト教の戦いがあったために、宗教争いにはもうこりごりしているので、オランダ人は商売に純化していると幕府が判断して、オランダは貿易の相手国としました。ですから、琉球とも、朝鮮とも、中国とも貿易はしていたわけです。

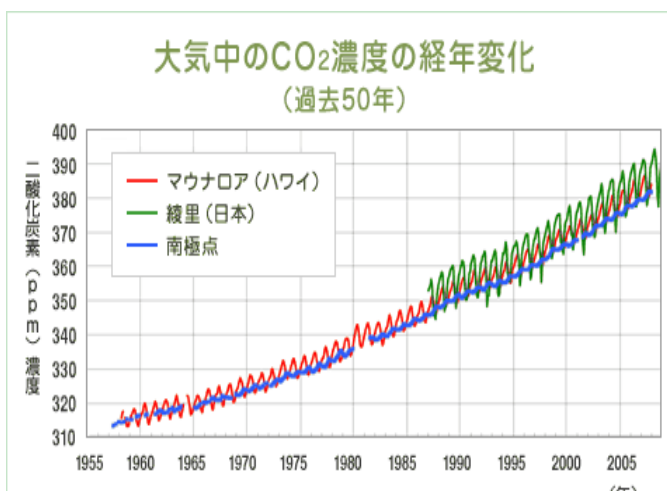
従って、江戸時代は鎖国だったと考えてしまうと、私たちの国がいかに関係がなかったかということで、一種の思考停止になってしまいます。今まで日本を考えると、われわれは鎖国を前提としていたために、江戸時代の初めの約 250 年間、海外とはほとんど貿易関係がなかったという前提で考えてきてしまっていました。ところが、今、申し上げたように、気候変動の下で寒冷化があり、そのためにロシアが東方に動いてきた。そのころから初めて、鎖国という考え方を明白に海外に対して示しはじめるという形で、日本は常に世界とつながっていたのです。そう考えないと、われわれの歴史を世界史の中に位置付けることができないのです。

このように、歴史と気候変動あるいは気温の低下は非常に密着に結び付いています。そして今、特に 1970 年ごろからは大変な、かつて人類が経験したさまざまな気候変動の中でもとんでもない勢いでの変化が訪れているわけです。

### 3. 地球温暖化と人口増加

#### 3-1. CO<sub>2</sub>の爆発的増加

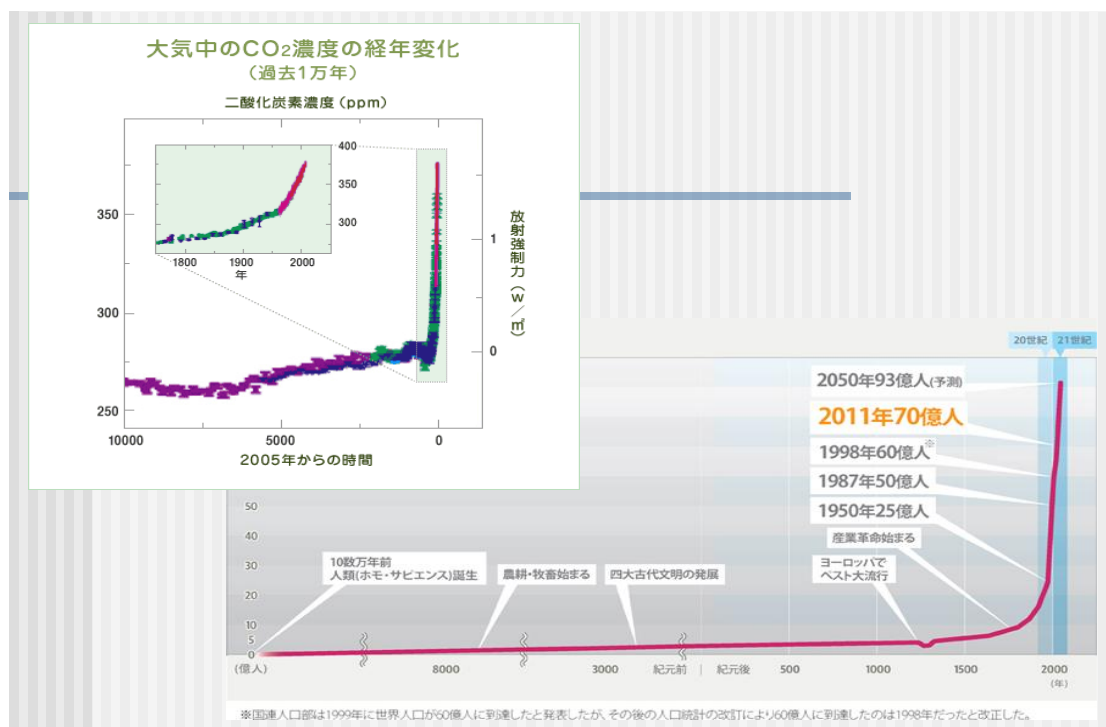
そして、その変化がどうやら CO<sub>2</sub> の変化によってもたらされているということが、今から 30 年ほど前から盛んに研究者によって唱えられるようになりました。このグラフは、1960 年からついこの間までの変化を示しています。



これはハワイのマウナロアという観測所の記録と、日本の大船渡市の綾里という観測地点

の記録と、それから南極点での変化を合わせたものです。これだけを見ると、CO<sub>2</sub>が大した変化ではないように見えます。1955年から2010年ぐらいまでを比べるとかなり違ってきていますけれども、とんでもない変化ではないような気がします。

ところが、人口と同じように、もっともっと長い軸で見ると、例えば1万年前のころからほとんどが緩やかなカーブだったのが、2000年を過ぎて、2005年の少し前からは、ほとんど垂直に上がっていきます（下図表）。この変化は、人口のカーブとほぼ一致するのです。ですから、CO<sub>2</sub>の増加は人口の増加に原因していることが分かるかと思います。しかし、現代社会に住んでいる人間にとっては、基本的な人権を守る、命の尊さを守ることが一番の根底にある考え方ですから、それがどうにかならない限り、恐らく増加していく人口に対する適切な対処手段は生まれてこないのではないかと思います。



### 3-2. 人口の爆発

今、人口が増えている大きな原因は、産業革命とそれに伴う食糧増産です。第二次世界大戦以降は国連が食糧不足を予想して、世界に食糧増産のための研究所をつくります。南米にはトウモロコシの収穫量を増やすため、ヨーロッパには小麦を増やすため、アジアにはフィリピンのマニラに、お米を増産するための研究所をつくりました。これを IRRI (International Rice Research Institute) と言います。そして、そのトウモロコシ、小麦、お米の生産の中で最も輝かしい研究成果を上げたのが、マニラの国際米研究所が生

み出した IRRI 米（イリ米）というものです。これはジャポニカではなくインディカ米の種類の交配を繰り返しながら、研究前の 10 倍近い収穫量のある改良種を生み出しています。これが大変大きく世界の食糧供給に貢献していて、その結果、世界が食糧危機に陥るところをかなりカバーしているのです。そして現在は、最先端の科学技術である遺伝子組み換え技術を使いながら食糧増産を心掛け、人口増加に対応しているのです。

しかし、そういうことをやればやるほど、恐らく CO<sub>2</sub>が増えてくるので、地球の温暖化が進み、その結果、海水の海面が上がってきて、失われていく土地も出てくるでしょうし、埋没する島もたくさん出てくるでしょう。それからオランダのように、国土の海拔が平均 1m に届かないようなところは、もしかすると何割かが海水で覆われてしまうことになるかもしれないというところまで来ているわけです。

ですから、地球の温暖化にはいろいろな理由があります。まず、CO<sub>2</sub>の爆発的な増加、人口の爆発がありました。そして、その原因として産業革命があり、科学技術の発達によって貧困、疾病、食糧不足などが軽減されてきたことがあると思います。それから、戦争の減少です。例えば第一次世界大戦のときには、ヨーロッパを中心にして約 800 万人の戦死者が出ました。これは考えられないことです。というのは、ずっと前からもちろん人類はいろいろな形で戦争をしてきていますが、鉄砲が生まれた時、つまり 16 世紀初めごろからナポレオン戦争のころまで、戦場で鉄砲が使われるようになって、兵士 1 人当たりの発砲数、ズドンと撃つ弾の数は 1~1.5 発ぐらいです。それが 1800 年前後のころです。

ところが、それから約 120 年しかたっていない第一次世界大戦のときには、1 人当たりの兵士が撃つ弾の数は、正確には覚えていませんが、100~200 発です。つまり、ナポレオン戦争に比べると、100 倍以上の火力を使って殺戮するようになります。現時点では、例えばこの間のイラク戦争や湾岸戦争、アフガン戦争のときには、やはり大変な火力を使っていますが、少なくとも銃で撃つ弾は、以前よりも攻撃力の弱いものを使うようになっています。それはなぜかというと、敵兵を 1 発で殺してしまうと、それで終わりなのです。ところが、火力が弱い弾が 1 発入ると、弾を受けてけがをした兵士を周りの兵士たちが助けなくてははいけない。病院で看病しなくてははいけない。1 人を殺すよりも、傷ついた兵士を生かす方がはるかにコストがかかるのです。ですから、少なくとも鉄砲の火力はわざと落としています。それほど汚いというか、ずるいというか、大変なことを人間は考え出してしまっています。そういう状況に今なっているということです。第二次世界大戦も大変な数が死に、ソ連だけでも 800 万人ぐらいの数が死んでいるわけですが、第二次世界大戦

以降は戦争の数が減少しているということが、この人口増加にもつながっています。

人口がどんどん増えていくので、当然、食糧を増やしていかなければなりません。今、世界的な再分配さえうまくすれば、地球上の約 70 億弱の人口を養うだけの生産量は全世界的に見れば確保されている状況ですが、これ以上増えていけばどうなるか分かりません。そのためには、どうしても遺伝子組み換えの食料を供給していかざるを得なくなっていると考えられます。

## 4. 国際化とグローバル化

### 4-1. 国際化とグローバル化の違い

そういう状況の中で、今、われわれを取り巻いている社会は、大変な国際化あるいはグローバル化が進みつつあります。国際化とは、お互いの立場を尊重しながら、なるべく密なお付き合いをしていこうということです。グローバル化とは、ある影響によって、相手の国の中にまで入って行って、相手の違う社会の構造までをもいつの間にか変えてしまう影響があるということです。日本では国際化も遅れていたし、グローバル化への対応も遅れていたのも、両方が日本の社会の中に入りつつあるのです。

### 4-2. 相互関係の緊密化

そういう状況の中で、今、世界は大変に緊密な相互関係を持つようになっています。以前だと、レース編みのパターンがそれぞれ 1 本の線だけで結ばれているという細い関係でした。ですから、どこかを一つぽつんと切ると関係が切れてしまうようなものだったのです。ところが現在は、一つの国ともう一つの国が何本もの糸で結ばれています。そして、それ以外の国とも何本もの線で結ばれています。だから、例えばこの国の政府とこの国の政府を結んでいる線、この国の NPO とこの国の NPO を結んでいる線、あるいはこの国の NGO とこの国の NGO を結んでいる線というものがあると、政府間で交渉が決裂して 1 本が切れても、ほかの線がたくさんつながっているのだから、なかなか一つの国ともう一つの国が完全に国交をなくしてしまうことはなくなっています。

例えばアフガン戦争のときに、アメリカがタリバンに対して空爆をしました。ところが、アフガンの中に既にアメリカの NPO などの民間チームが入り込んで、アメリカの空軍が痛めつけて、けがをした人たちを助けていました。それが昔とは違う状況なのです。そのように、相互の緊密な関係が世界中で目に見えるものも見えないものも、いろいろな形で結



び付くようになっていきます。

例えば、ゴードリアンノット（ゴルディオスの結び目）という有名な言葉があります。これはアレクサンドロス大王がギリシャからボスポラス海峡を渡って、今のトルコに入って、ゴルディオンの所にやってくると、ゴルディオンの神殿の前の柱に結わえ付けられている戦車がありました。ところが、その戦車と柱を結び付けている綱は大変に複雑な結び方をしているので、誰もそれを解くことができない。町の古老は「これを解いて、柱から戦車を外した人こそアジアの王になる」と、アレクサンドロス大王に言いました。すると、アレクサンドロス大王は、自分の持っている剣を抜いて、スパッとその綱を切ってしまった。これが有名なゴードリアンノットという言葉です。つまり、勇猛果敢にある決断をして実行することを言う言葉でした。このゴードリアンノットに象徴されるのが、さまざまな過去の戦争です。戦争で難題を解決してきたわけです。

ところが今は、現在のアフガンを見ても分かるように、アフガンとアメリカが戦って、政府間交渉は全部タリバンでしたから、その線が切られてアフガン戦争になりました。しかし、このタリバン政権はパキスタンとも、パキスタンの軍部とも結び付いているので、今、またどんどん勢力を回復してきていて、結局、あれだけアメリカが巨額の軍事費を使って戦争をしたにもかかわらず、タリバン政権の残党を一掃することができなくなってしまいました。そういう状況が現代の社会です。この緊密な相互関係の中に、われわれは好むと好まざるとにかかわらず放り込まれているのです。

#### 4-3. 複雑化する相互作用と輪郭の喪失

もう一つは、複雑な相互作用です。秋葉原の総武線は、バブルのころには一つの車両に180%を超える乗客が乗って、朝夕のラッシュアワーでは大変な混雑をしていました。それだけの乗客が一つの車両に乗っていると、中で押されに押されて、圧力で気持ち悪くなって死んでしまうという、圧死という現象がたまに起こりました。今はもうそういうことはありません。この場合、乗っていた乗客全員が実は加害者なのです。しかも、この中で圧死の犠牲になった人も、実は自分の体積分をこの車両の中で占領していたわけですから、自分自身に対する加害者なのです。つまり、誰が明確に加害者で悪いやつで、誰が被害者で弱いやつかという区別がだんだんなくなってきています。そういう相互作用が非常に複雑になりつつあるのも、また現代社会の特徴の一つです。ですから、かつての東映の時代劇のような、どちらかが悪人でどちらかが正義の侍という勧善懲悪のパターンは、ほと

んどこの社会からはなくなりつつあります。

さらに、輪郭がだんだんなくなり、ボーダレス化してきています。以前は国という単位が明確な輪郭を持っていました。ところが、今は一つの社会を統制・統括しているのは、政府だけではなく NGO であったり、NPO であったり、いろいろな組織があります。そして、この NPO や NGO の中には、自分の領域から飛び出した状態で活動しているものや、その指令を受けているものもたくさんあります。ですから、あくまでも国連体制というのは国の体制ですが、そこからはみ出しているものがたくさん出始めているので、国だけでは統制できない形になりつつある。それが輪郭の喪失ということです。

つまり、相互作用があるし、非常に複雑な関係を持つようになっているということで、緊密な相互関係があるということです。それから、非常に充溢した、充満した相互作用が生まれつつある、輪郭がなくなってきた。そういう社会の中に国際化とグローバル化という津波が、特に日本には押し寄せているということです。

#### 4-4. 英語のグローバル化

もう一つ注意しなくてはいけないのは、30~40 年前までは、スペイン語や英語、あるいはフランス語、ドイツ語が一応、国際的に通用する言葉として流布していました。事実、国連では連合側という言葉が公式用語になっていますから、英語、フランス語、中国語、ロシア語が公用語として使われていました。それらの言葉がほぼ肩を並べるような形で使われていましたが、その後、どんどん英語の勢力が強くなって、今では国際語はもうほとんど、英語が主流になりつつあります。

その中で、いい情報、あるいは知っておかなければいけない情報がどんどん英語になってきています。しかも、インターネットの時代になって、インターネット上にそういうものがたくさん蓄積され、流通するようになっています。英語圏と言われる国には、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダがあります。また、それ以外に第 2 公式語として通用している国は、インド、南アフリカ、あるいはインドネシアやフィリピンなど、たくさんあります。これが、英語が非常に重要な言葉になりつつある大きな理由です。

### 5. 還元論と全体論

#### 5-1. 現代文明を考える

今申し上げたような国際情勢や世界的状況の中で、われわれが文明を考えるときには、

どうしても環境問題を抜きにしては考えられなくなりました。また、文化の多様性やグローバル化も考えなくてははいけません。それから、いろいろな意味での大衆化、情報化も同様です。大衆化について端的に言えば、日本の場合は第二次世界大戦が終わった昭和 20 年代のころには、まだ大学への進学率が 30%までいっていませんでした。ところが今は、大学への進学率が 5 割を超えています。そういうところに大衆化が非常に端的に表れています。また、言うまでもなく、インターネットの爆発的な普及が情報化をさらに促進しています。

そういう状況の中で、われわれはこれからどう生きていけばいいのか、あるいはどう考えていけばいいのか、簡単にお話しします。一つのアイディアとしてお聞きいただければいいと思います。私がこれから申すよりもはるかに素晴らしい考えや、現実味のある具体化の可能な構想があるかもしれませんが、そういうことを考える上でも一つのヒントになるのではないかということをお話ししておきたいと思います。

### 5-1. 還元論の功罪

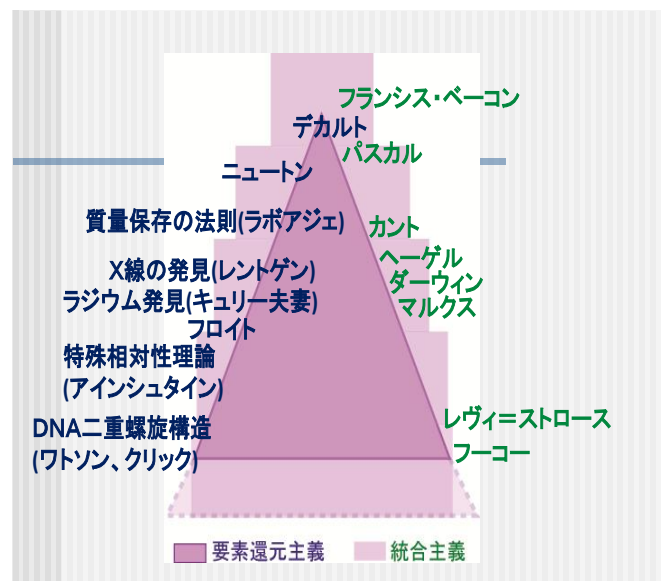
まず、還元論と全体論が昔から言われています。

還元論とは、具体的にはデカルトが『方法序説』というオランダのアムステルダムに亡命しているときに書いた本の中で初めて指摘したものです。

ある出来事やある物をもっと深く考えてみる。なぜそういう出来事が起こったのか、なぜこの物が存在しているのかを明らかにするには、その出来事を構成しているさま

ざまな要素を探り当てて、その最小単位である要素をもう一回つなげ合わせたり、組み合わせたりすればいい。そうすれば、その物事がなぜできているかが分かるということをデカルトは提唱します。これを要素還元論と言います。

そして、デカルトが唱えた要素還元論の中から、人類にとってさまざまな目覚ましい発明・発見が行われてきました。最初に出てきたのが、あの蒸気機関の発見です。水をどんどん熱していくと、湯気になって、それが大変な圧力を持つようになる。それを閉じ込め



れば、力になって、機械を動かすことができる。また、それに結び付けて製糸工場の機械や蒸気機関車などさまざまなものを、それまでは考えられなかったような形で実現することができるようになります。

例えば 1800 年ごろまでは、世界中、海上で物を運ぶのはみんな帆船でした。有名なカティサークはたった 300t ぐらいですが、東インド会社が使っていたアジアとヨーロッパを結ぶ船は 400~500t で、乗組員 700~800 人がその一つの船に乗って、帆を上げたり下げたりすることによって海上をずっと航海していました。そして、例えば東からはお茶などさまざまなものをヨーロッパに運び、ヨーロッパからは新しい羊毛などが運び込まれたのです。

ところが、蒸気機関が発明されることによって帆船はなくなり、蒸気船に取って代わりました。それによって、風に左右されることなく運搬できるようになります。ですから、1850 年ごろからは、機械万能主義で、機械の改良や機械の新しい使い方さえ発明していけば、人類の将来は全く不安がないという機械論的な世界像が世界を席卷しました。日本も明治政府になってからは近代化ということで、この機械論的な世界像を実現するべく富国強兵を図っていきました。

しかし、その結果として何が生まれたかという、一方では輝かしい将来の人間社会が生まれた代わりに、他方では環境の悪化ということが起こったのです。例えばロンドンのあの霧も、今から考えると、ほとんどが機械論的な世界像の中で燃やされていた石炭などの煙が原因となって、ああいう公害が起こっていたわけです。

1900 年ごろからは、機械論のもう一つ先を行く原子論的な研究が進みました。つまり、キュリー夫人がレントゲンを発見したころから、原子論的なレベルでの研究がどんどん進んでいきました。そして、レントゲンのようなもので人間の体を見ることができるようになり、そのために疾病治療が改善されるようになっていきます。しかし、その一方で、結局は原爆や水爆が生まれてしまったわけです。

そして現在は、DNA など遺伝子研究の目覚ましい発達によって、例えば京大の山中先生が発見したように、細胞の再生までが可能になりつつあります。しかし、今までの経験から考えると、光の当たっている部分には、必ずその結果として新たな暗闇が生み出されてきています。今、われわれは遺伝子論的な世界像に希望を託していますが、その一方にとんでもない暗闇が生まれる可能性があります。

それは、恐らく生物的な怪物です。既に抗生物質をたくさん与えられたために耐性が非

常に強くなり、ほとんど抗生物質の効かないウイルスが出始めています。これから遺伝子、DNAの組み換えなどによって、生産量の多い新しいトウモロコシができたり、小麦ができたり、ジャガイモができたりするでしょう。それが人間にどう影響を与えるのか、人間の体に変化を与えるのか。そこでは、とんでもない怪物が生まれる可能性があります。

## 5-2. 全体論的な考え方

還元論が人間の社会を着実に発展させてきたのは確かです。しかし、機械主義的な時代、あるいは原子論的な時代には、その都度、その反対の闇の部分が生まれてきているということを、われわれは忘れてはなりません。そうであるが故に、還元論だけではどうしてもコントロールの効かないこの世界全体を、もう少し総体として考えながら、人類全体の安寧や安全を考えていくべきではないか。そこで昔から唱えられてきたのが、ホーリズム(全体論)という考え方です。

例えば、デカルトが要素還元論という科学技術にとって大変有効な方法を唱え出し、その結果として、さまざまな研究や発見が行われてきました。その途中では、それを抑制するかのように、いろいろな思想家や哲学者、文化人類学者、あるいは歴史家たちが、そんな単純なものではないという警告を与えてきたわけです。ところが最近では、要素還元論での研究は相変わらず盛んに行われ、相変わらず素晴らしい成果を出しているにもかかわらず、そのことを人類全体のトータルな文明や文化としてとらえ直し、それが本当に人間の幸せなのか、人間の生存のために安全で有効なものなのかと問い掛ける考え方が出なくなってしまっています。

つまり、還元論で先端技術や先端科学が発達してきているにもかかわらず、これを統括する考え方がどこにもないのです。われわれの社会は、部分的な発達はどんどん進めながら、全体の調和は神頼みになってしまっていて、誰もこれを総括したイメージを持ってなくなってしまっているのです。科学や技術が発達しているのに、その調和や相対的なまとまりについては知らぬ振りをしてしまっているというのが現在の状況です。大学の教え方やカリキュラムさえ、そういう形になりつつあります。

## 6. 新たな枠組み、装置、誘因としての日本海学

だからこそ、われわれはもう一回、少しゆっくり落ち着いて考えてみるべきではないでしょうか。先端的な研究をしている方は、どうぞそれをやってください。だけれども、も

う一回落ち着いて、そういう先端的な科学や技術がどれだけわれわれ人類に益をもたらしてくれているのか。人類の生存のための保障を与えてくれているのか。あるいは、本当になければならないのか、なくてもいいものなのかということ、少しゆっくり考えようということ、徐々にいろいろな人がいろいろな分野で提案しつつあります。

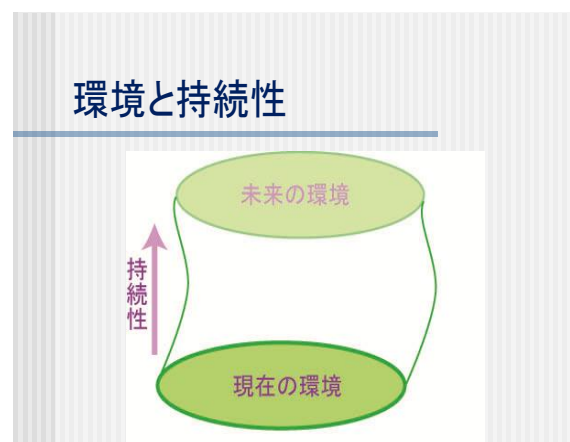
そのために、いろいろな方法が組み合わさっていつているのですが、もう 10 年以上前から、この富山から「日本海学」というものが提案されて、さまざまな研究成果が発信されてきました。規模は小さいですが、この日本海学という枠組みは、今申し上げた先端的なものを要素還元論によって探究して成果を上げていくと同時に、日本海という場を頭の中に描き、日本海と日本海沿岸地域全体を考えながら、ここに住む人たちの将来のために、幸せのために、あるいは安全のために何ができるかということを考えていこうというしています。

すなわち、今まで申し上げてきたようなホーリズム（全体論）の小さな実際の思考例、少しずつその試みをしている場というものが、この日本海学にあるのではないかと。そういう意味で、この地域にあるいろいろな文化、社会、言語、民俗、歴史、宗教、科学技術、研究、そして観光をトータルに考えることができれば、放置状態にある要素還元論の結果としての、われらの現代文明の中にある一番弱いところを、少しは補填することができるのではないのでしょうか。

非常に雑駁な話で申し訳ないのですが、今日お話し申し上げたのは、われわれが生きていくために、そして将来のためにどうすればいいのかということ考えた、単純な、私なりの私論です。

## 7. 環境と持続性

最後に一つだけお話ししておきたいのが、環境と持続性についてです。サステナビリティとは、現在の環境を未来になるべくいい状態で引き継ごうとすることだと私は考えています。ところが、環境というものの中には本当にさまざまなものが入っています。先ほど少しお話ししたような、少しずつ上昇しつつある現在の気温や降水量、CO<sub>2</sub> の多さ。それから、例えば飛行機がたくさん飛ぶよ



うになっていますが、それがオゾン層にどう影響を与えているのか。地上を走る車の数がこれだけ増えて、ガソリンをあんなに消費してもいいのかどうか。最近よく言われるように、中国でだんだん肉食が普及しつつあるけれども、あれだけ大量の人口がいるところで、牛という非常にコストのかかるものを食べて、世界の食糧危機を克服できるのか。さまざまなものが入っています。

環境というのは実は大変に概念的なもので、われわれが頭の中で認識している一種の世界なのです。この中には、私たち自身の基本的な人権や生命が何よりも勝る価値のあるものだという認識、あるいは違う文化の人たちが持っている文化を大切にしようとか、世界中にさまざまな生物がいることを認識しようとか、そういうもの全部が入ったものが環境なのです。ですから、さまざまなアプローチと見解によって、環境という認識は違ってきます。できることなら、そのトータルなものを次世代、次々世代にも良好な状態で引き渡すことができ、それを資源として、自分たちの財産として、また次の世代にまでなるべく負担のかからないような状況に引き継いでいこうとするのが持続性という運動です。

そして、この環境の中に占めている、例えばDNA研究の発達や、それによって新たに生まれたトウモロコシの新種、あるいは仏教の考え方、キリスト教の考え方。あるいは、われわれはバブルを経験してしまっているのです、どうしてもお金の価値を大きく見がちだけれども、お金の換えられない価値もあるのではないかと。そういうものをいろいろトータルに考えていくことが、本当の環境を守ることだと思えます。

## 8. 経済本位主義から日本海学の充実へ

明治初期、日本にはたった 3500 万の人口しかいませんでした。そうでありながら、今のアメリカと同じくらいの、90%近い識字率を持っていました。あれほど貧しい中で、あれほど識字率の高い国はまさに例外的でした。例えば産業革命が生まれ、世界の七つの海を支配したイギリスでさえも、ビクトリア朝時代のちょうど真ん中の 1850 年ごろ、つまり日本で言えば江戸の末期の識字率が五十数パーセントです。ですから、日本の方がはるかに高い識字率を持っていました。しかも、「貧しい国だけれども、これほどにこやかで、清貧に打ち負けていない国民はいない」ということを、日本に明治初期に来たいろいろな旅行家たちが、さまざまなものに記しています。

われわれは恐らくバブルを経験してきたために、これほどお金を大切にするようになりました。しかし、私が子供のころは、祖母などに「男の子たちがお金のことを言っ

けない」という教育をされてきました。今、日本は経済本位主義的になっていますが、経済はわれわれが幸せを感じ、安全を感じ、そして次世代へ穏やかに世代を継承していくための手段なのです。目的ではないのです。ところが、日本はとんでもない経済発展をってしまったために、いつの間にか経済を大きくすること、活性化すること、あるいはより恩恵を得ることが目的になってしまっています。そのことを反省しながら日本海学を充実していけば、この小さな日本海、あるいはそのコアである富山県が、もっともっと世界全体の文明を見渡しながら、私たちの生き方を教えてくれるのではないのでしょうか。